

「パイ生地はねかせてから」

何かに対して「こうであってほしい」と思うことがある。
そう思うに至るまでの、自分の熱意や努力と等価であることを
ついつい求めてしまっているのかもしれない。
それをやめようと思う。
思っているのだが、家族に対しては、つい。
というか、おそらくお互いに。
気遣い、ささやかな期待、甘えと受容が交錯する。
そこには少なからず我慢も存在し、微妙な緊張感も見え隠れする。
だから家族は、ときに切ない。
切なくなると、自分の心を守ろうとする機能がはたらいで、あきらめモードが発動する。
こういう場合のあきらめモードは、あながち悪くない。
あきらめモードになって、「求めてしまう心」をそっとねかせるのだ。
パイ生地なんかは、ねかせると扱いやすくなるとか。
だから私の心も一旦ねかせて、それからもう一回考えてみればいいや、と思う。
年齢を重ねると、その分、社会からの要求も増える。
やるべきことや考えるべきことが増えて、それ相応の結果も求められる。
年齢を重ねた分、積み上げてきたものは、より熟成されてはいくが、
あれもこれも抱えて上手に処理するのは、とっても疲れる。
だから、私は抱えているものを切り分けて、部分的にねかせている。
部分的にねかせておいて、しばらくして取り出す。
「これはそろそろかな」という具合だ。
腐らせないようにするには、冷蔵庫の中に何が入っているのか把握しておき
定期的にチェックする。
うまく料理したり、ときにはサヨナラして、冷蔵庫の中をすっきりさせようと思う。

